
翡翠の星屑

天瀬斗基

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠の星屑

【Zコード】

Z8011A

【作者名】

天瀬斗基

【あらすじ】

この世界にはあらゆる物語が詰まっている。過去も未来も、忘れ去られた話でさえも。だから、世界を知ろう。あても行き先も要らない。持ち物は白紙の地図だけでいい。行き着く先など、誰にもわかりやしないのだから。

1・最果ての地からの始まり

暗く冷たい牢の中。蠟燭の灯だけが石壁を照らしていく仄かに明るい。けれども地上の太陽の明るさには程遠く、暗闇と言つても過言ではない。

時折響く水の音と、この近くに住む物好きな小動物の動き回る音だけが耳に聞こえてくる全て。壁には罪人を繋ぎ止める鎖と重りがいくつも規則的に並び、或いは無造作に置かれていた。

中には白骨と化した、元は人であったものがそのまま残されているところもある。

暗くて、寂しい、孤独の場所。

ここは、罪を負った人が一生を終える終着駅だ。

積み重ねれば山のようになるであろうその骨の周りに、数人の人間が繋がれている。そして、今やそのほとんどが生き絶えているという有様だった。

長年ここにいて、あまりに多くの死を見てきた。この中で何人の気が狂い、人が獣になつていく様を見てきた。

その為、今では自分が生きているか死んでいるかすらも分からない状態だ。感覚が麻痺している。ひょっとしたら、自分の気も既に狂っているのかもしれない。

喉の奥でくくく…と笑みを漏らす。

そのまま声に出して笑つても良かつたが、すぐに引っ込んだ。どうやら、珍しいお客様が来たようだ。

石で造られた床に、一人分の足音がコツコツと響く。時折自分達の様子を見に来る看守がいるにはいるが、この歩き方は看守ではない。看守の音はもつとゆっくりとしているからだ。

では、新人だろうか。それにしても足音が一人分というのはどうも

おかしい。もしこれが新人ならば、連れてくる者が別にいる筈だからだ。それとも、ようやく自分を殺してくれる死神でも現れたのだろうか。この薄暗い牢獄から解放してくれる誰かが。

そうだといい。そうすればもう、こんな場所とはおさらばだ無意識の内に、再び笑っていた。

「何がおかしいの？」

その声は、自分が予想していたどんな声とも違っていた。
口元に笑みを残したまま、訪問者に顔を向けた。否、顔を向けることしか出来なかつた。

何故なら自分の両手足は、未だに鉄の鎖に戒められているのだから。

視線の先には一人の人間がいた。久々に見る、生きている人間が。随分若いなりをしている。出で立ちは少年のものだが、微かな灯りの中で浮かび上がるその顔はどこかしら少女のようにも見える。「ひょっとして、既にイカれてる?」

子どもは腰を曲げ、前屈みになつて尋ねてくる。
額に、何かの紋が刻まれているのが見えた。

「あんたは誰だ？　何でここにいる？」

人とまともに口を利くのは久しぶりだった。

「ボク？　見て分からぬ？」

その人間は真っ直ぐに立ち、両手を広げて自分の服装を見せた。右手には妙な棒を持つていて、動く度に後ろで一つに結わえてある髪が揺れる。腰につけてある袋と今身につけている服やマントから、どう考えても旅の途中であることが伺えた。

「村を出てきたのはいいんだケド、途中で雨に降られてさ。雨宿りするのにいい場所があつたから入つてみたんだ」「

」
こりと微笑む。

……もしかしたら、単なる世間知らずの子供かもしない。

「ここが何処だか知つているのか？　あんたみたいなお綺麗な子供が来るようなところじゃないぜ。分かつたら、とつととおうちに帰

りな

その子供は形容し難い表情を浮かべて頬を搔いた。

「……ないものに帰れって言われても」

「……」

少し興味を覚えて見上げる。

悲しい、と言つよりかは本氣で困つているような顔だ。

「それに、ここはあの最果ての牢屋でしょ？ それくらいは知つてるよ」

そんなことは何とも思つていない、という口調で。

もう何年か前のことになるが、囚人の様子を見に来た看守は『最果ての牢屋』といふ言葉さえも口にするのを嫌がっていた。加えて、自分達のことをゴミの一種として蔑み見ていたといつのに。

この子供……

「それで？ 囚人さん」

「何だ」

「ここから出たくはないの？」

何を言われているのか、理解するのに少し時間が掛かつた。

長い間、自分に　いや、自分達に、そんな言葉を掛ける者などいなかつたからだ。脱走自体、考えるだけ無駄だった。

「俺が罪人だと知つていて、尚ここから出たくはないのかと訊くのか？」

「うん」

呆気ないほど簡単に頷いた。

何故だ？俺が怖くないのか？

「これを解いた瞬間にあんたを殺すかもしれないぜ？」

両手足を戒めている鎖をチャラ、と鳴らす。意外に重々しく聞こえた。

「本当に殺すなら、やる前にそんな忠告言わないと困つケド？ それに、あんたはボクを殺さないよ」

自分の鎖を外そとと動く子供に、眉を顰める。

「……何でそう言いきれる」

だつて、

子供はいつ答えた。

「だつて、人の死を多く見ている人はそれと同じくらい死ぬコトがどんなコトかを知つてるから。自分がその死に関わる関わらないにしても。やっぱ死は辛いよ……。置いてかれて独りになつたみたいで、怖いよ……」

答えを告げた。

同時に子ども自身にも言い聞かせていふような気がしたのだが、単なる氣のせいだらうか。

「解けたつ！」

思考は子どもの無邪気な声で中断された。

自分の人生の大半を共にしてきた鉄の戒めがようやく外される。なんだか体が軽い。嘘のように樂になつた両手足には、赤い跡がくつきりと残つていた。

「うわ、痛そ。囚人さん、歩ける？」

鈍つっているどころではないが、それ程支障はなさそうだ。あんなに簡単に鎖が外れたのも、度々自分が壁から離れて散歩に出ていたからに過ぎない。

「……その”囚人さん”つてのやめる。俺にだつて、名前くらいはある」
牢屋に入る時に捨てて一度と使われることがないと思っていた自分の名前を、まさか再び使える口が来ようとは思つてもみなかつたが。

子供は歩きながら尋ねてきた。

「なんて名前？」

記憶の隅から引っ張り出す。　　全く。自分の名前だといつのに。

「シリックだ。あんたは？」

「ラスター」

歩いていて気づいたが、このラスターとかいう子どもは自分より遙かに背が高い。 と言つても、頭2つ分くらいだったが。

「お。晴れた」

一足早く出口にたどり着いて空を見上げている。
ここに連れて来られた時となんら変わりない入口。 今度は逆に外へ出る。

「 つ

あまりの眩しさに目を細めた。 外の世界はこんなにも明るかつたのだ。

すぐ目の前の手の届くところで、ラスターが背を伸ばしている。

「ん……」

頭上のあちこちから鳥の鳴き声が聞こえてくる。 道の脇には木々が生い茂り、小さな森を作っている。 風に耳を澄ますと、遠くから川のせせらぎが聞こえてくるような気がした。 視線を落とすと、足下では虫が懸命に何かを運んでいる。

こんなに、外の世界はこんなにも”生”が溢れている。 必死に生きようとしている。あの暗い、死の匂いに満ちた牢獄よりも、ずっと、ずっと。

シリックは思い切り空気を吸い込んだ。

暖かく、優しい空気だ。

自分もその中に入れるだろうか。 死の匂いを忘れるとは出来ないが、”生”に繰るようにして生きていいく事が。

「行こつか

見れば、ラスターははにかんだ表情を浮かべて笑っていた。 周りの全てを明るくする太陽のように、明るく、眩しく。 何処へ、とは言わない。 何処に、とも訊かない。

「ああ」

ひょっとしたら、自分にも出来るのかもしね。

短く一言を返し、ラスターの横に並んだ。まるで、ずっとそうして歩いてきたかのように。

二人は道の先へと歩く。
陽が射した世界を。

ショーリックは、空に浮かぶ太陽を見上げる。
ああ、良く晴れた日だ
頭上を仰ぎ、目を細めた。

これが、旅の始まり。

2 夕暮れ刻の町中（前書き）

出会いから三年後、港町にやってきたラスターとショーリック。ひと時の休息を求め、一軒の宿屋を訪れた。

2 夕暮れ刻の町中

それからしばらく月日が流れ、二年後。

世界のあちこちでは、『輝石の小島』の噂が流れていた。
そこへたどり着けた者は何一つ不自由なく暮らせ、幸福なままで生を終えられると言われている。

しかし、それはあくまで噂話。実際に行けた者がいるのかどうかはさっぱり分からず、島を目指した者は誰一人として戻つて来なかつたというもう一つの噂もある。

行つた人がいなくなる、つまり、世間から忘れ去られるという意味から島には別の呼び名がついていた。

『忘却の島』

それがもう一つの島の名前だ。

噂があるにも関わらず島を目指す人は後を絶たない。欲故か、はたまた人の性故か。

理由は当人達にしか分からない。中には、人生の最期を『忘却の島』を探すことで終えようとする人もいるだろう。幼い頃に夢に描いていた宝島を目指すかのように。

そんな時代の片隅で、無理をすれば親子にも見える奇妙な年格好の二人が旅を続けていた。

「ひょっとして、港が近い？」

初めて出会つてから三年が経つが、その時から少しも変わらない長身の男を見上げる。半分は自分があまり伸びないせいでもあり、諦めているせいでもあるのだが、それはともかくとして。

頭一つ分あつた差は、今では一つ分に減つている。少しは伸びたのだという証拠だ。

ラスターの視線を受けた男は薄く笑つた。

長い間あんな場所にいたせいか初めはほとんど笑う

自嘲じ

みた笑いしか見せなかつたが、あの頃から比べると随分表情が和らぎ、他の感情が増えた気がする。

「だろうな。潮の匂いがする」

「うん。ボク達のトコまで届くってコトは、もうすぐだね」

「ああ」

そう。先程から鼻をくすぐるのは、紛れもない潮の匂いだ。これが海が大分近いことを告げている。

『海』ではなく『港』と断言したのは、まだ遙かに遠くではあるが前方に灯台が見えたからだつた。

この近くの灯台がある港、と言えばたつた一つしか思い当たらぬい。と言うよりもそこしかない。

それが今微かに視界に捉えることが出来る漁港の町・ルパであり、自分達の目指す目的の地でもあった。

ルパは漁業と産業で発達した、今やこの世界では欠かすことの出来ない町の一つだ。ルパの町の歴史は古く、人々が海を恐れて近づかなかつた時代から始まる。

初めは何人か的好奇心を持った人々が海へと繰り出していき、その者達が帰つてくる場所として拓かれたのが始まりだ。やがて人が集まり、徐々に他の大陸へと渡れるようになり、交易も盛んになって、今に至る。

町自体は小さいが、世界中でルパの名を知らない者はおそらくいないだろう。

「早いトコ暖かい布団で眠りたいよ。ふわ……」

「俺も同感だ」

歩きながら、ラスターは大きな欠伸を漏らした。長旅の休息は、もう少し。

重たい身体を引きずりながらも何とかたどり着くことが出来た。夕暮れ刻にも関わらず、町の明かりのおかげで辺りは昼間と同じ

くらいに明るい。真夜中になると今度は灯台の明かりだけが町を照らすのである。

光が隅々まで行かないので不便なこともあるかもしれないが、真夜中に灯台の明かりだけにすることは、この町の古くからのしきたりなのだそうだ。

「ショーリック、宿屋どこにあるか分かる？」

大都市と比べると小さいとは言つものの、ルパの町はそれなりに大きい。町中で迷う事はないだろうが、とにかく今は歩く距離を出来るだけ減らしたかった。

「どうだろうな。前にここに来た時から大分時間が経ってるだろうしな。俺の記憶とは違うかもしれないぜ？」何だ、もう電池切れか？」

お腹を押さえているラスターに言つた。

「うーん……まだ少しばかり保つ、かな？」

昼に食べて以来休憩も何もなしにずっと歩き通しだった為か、お腹が空くのが早かつたようだ。

「じゃあ頑張るんだな」

頭の上に手を置かれ、ラスターは大きく頷いた。

「うん。だから、早く探そう」

「はいはい」

町の入口から中に入ると、まず露店の多さに目を奪われる。色とりどりの布で仕立てた洋服に、変な形をした果物。おいしそう匂いがあちこちから立ち込められ、猛烈に鼻に来る。

「わ……」

お腹からきゅるきゅると音が鳴つた。

買い物食いしたい気持ちを抑え、横田で見ながら店の前を通り過ぎる。

(あ。あそこにも寄りたいな)

後で買い物出しに来る時の為に、大まかな日星をつけておくことも忘れない。

(あと足りないのあつたつけ)

店の位置と名前をインプットしながらも、頭はフル回転した状態だ。

お腹は減っているが、それで何も考えられないわけではない。

(宿屋の部屋で確かめよつと)

そうやってあちこちに目を動かしていると、頭の上に何かが置かれた。

「うん？ 何？」

歩きながら器用に振り向く。置かれたのは、ビーチやリショーリックの手だったようだ。

「左前方」

置いたのとは逆の手で方向を指し示される。指の先を目で追つていくと、そこには大きな家があった。

ただし、民家ではない。

隣に並んでいる民家よりかは大きく、入口から様々の人が出入りしている。何よりも、扉の上に掲げられた小さな看板が『宿屋』を記している。

「これが宿屋？ ふうん」

しげしげと眩ぐラスターは、後ろから軽く背中を押された。

「ほら、行くぞ」

シリックの言葉に破顔した。

「うん」

二人はいそいそと宿屋に向かった。

やはり、腹が減っては戦は出来ぬ、だ。

ところで、夕暮れ刻と言えば大抵の仕事が終わる時刻。そんな時間に町に着いたというのだから、もう少し予想出来たことがある筈なのだが。

「うわ」

「しまつたな」

ドアを開けた途端に聞こえてきた喧騒と笑い声に、ラスターは入口で突っ立ってしまった。

宿屋の一階は食堂になつていて、一日の仕事を終えた大人達が杯を交わし合い、席は既に満席となつていたのである。

「弱つたな……。どうする？」

意見を仰ぐべく、後ろに立つショーリックを見上げた。

「宿の部屋だけでも確保しておこう。ここまで来て野宿つてのはごめん被りたいしな」

「言える」

自分が考えていたのと同じ意見を述べたので、ラスターは思わず笑ってしまった。

「じゃあ、ボクが頼んでくるよ」

腰に下げていた袋を持ち上げて示す。

「その間に席を探しとく」

二人はそれぞれの役割を果たすべく奥へと入つていった。

ラスターはまずカウンターに向かつた。やはりここも席は満席だ。とても座れそうにない。

（ここいら辺も無理だな。シェリック、ほんとにこの中から探せるのか…？）

考えてみれば至難の業だ。

まあ仕方ないなと思い、自分に当たられた役目を果たす為、ラスターは声を上げた。

「すいません！」

カウンター越しに人を呼ぶと、客の一人と喋つていた人がこちらに気づいた。

（あの人が店員か）

彼は話を切り上げてやつて来る。

「はい、何でしょつか？」

優しそうな中年の男性だ。

「ここに泊まりたいんだケド、部屋の空き、ある？」

周りが騒がしいので、声を大きめにして喋らなければならぬ。
不便だ。

「部屋ですか？　ああ、はいはい。ありますよ。少々お待ち下さい」
何とか通じたらしく、一言言つてどこかへ行つてしまつた。
しばらくして戻ってきた男性の手には一冊の冊子が抱えられてい
た。

(ここ)の宿帳かな)

あまりよくは見えなかつたが、あながち間違いではなさそつだ。
カウンターの上で開いた冊子の中には、何人もの名前が書かれて
いる。ちらりと覗いた名前の多さに思わず目を見張つた。
やがて、冊子の名前を順にたどつていく手が止まる。

「おや」

男性は声を上げる。

「お客様運がいいね。最後の一部屋だよ」

ペンを走らせる時だけかけた眼鏡の奥で微笑んだ。

「ほんと？　うわ、ついてるなあ」

ここまで来て席も宿もなしでは報われない。自分達の運の強さに
感謝し、一つ思い出した。

「あの、ボクの他にもう一人連れがいるんだけど……」

「ん？　そうかい？」

書き終えた宿帳から顔を上げた。

「大丈夫さ。幸いベッドは二つある。　　」とすると、「一人だね」
額ぐラスターは、丁寧な字で書き込まれていく文字を見ていた。

「これでよし、と。一人で20ロンド」

「へえ……意外と安いんだ」

宿屋の相場を大まかに言えば一人当たり5ティア、つまり50口
ンは必要だ。

それに比べれば随分安い。さつき覗き込んだ名前の量の多さが、店の繁盛さを物語っている。

「ははは。よく言われるよ」

ラスターは既に手に取っていた袋の中から一〇ロンの銅貨を一枚取り出し、相手に渡した。

「毎度あり。さて、これが部屋の鍵だ。部屋は一階にある。好きに使ってくれて構わないさ」

お金と引き替えに差し出された鍵を受け取る。一緒についているプレートには、部屋の番号が刻まれていた。

「ありがと」

「ごゆっくり」

男性は宿帳を置くべく再びどこかへ行ってしまった。

彼の背中を見送ると、ラスターはその場で周りを見渡した。この中のどこかに席を探しているショーリックがいる筈なのだが、いかんせん人の数が多くてうまく見つけられない。

(いろんな人がいるな)

日に焼けた人もいれば、黒いローブを着ている人、見た目貴族のようないい人。

色々な人がいる。ルパが有名なのは本当のようだ。

さて、こちらはショーリックである。
席を探しておぐとは言ったものの、こう人が多いと見つかるものも見つからない。

何とかなると楽観していたのが甘かったようだ。

(どうするかな……)

店の中をうろうろしていたのだが、何かに吸い寄せられる様にその席にたどりついた。

「や。」

一人掛けのテーブルに座っていた、見覚えのある顔。

「……何でここにいる

ここには決している筈のない人物に、驚くより先に呆れてしまつた。

「それはこっちの台詞だ つと。そちらはお困りのようで? 「

変わらない、含みのある笑顔。

「見れば分かるだろうが」

彼はす、と席から立ち上がつた。

「互いに積もる話は後にしようか。今は俺も用事があるのでね」暗い闇色のローブを身に纏つた彼は人々の間を縫つていき、やがて町の夜の中に溶け込んでいく。

「……」

彼を無言で見送つた後、シェリックは空いたテーブルにありがたく座ることにした。

しばらく彷徨い歩きながら探していると、何処からか声が掛かつた。

「ラスター！」

シェリックだ。

声のした方を見ると、一人掛けのテーブルに座つて片手を挙げている彼の姿が見えた。

(ほんとについてるかも)

人混みに苦労してシェリックの元までたどり着き、向かい側に腰をかけた。

「ふう、すごい人」

ようやく息をついてシェリックに話しかけた。

「こんな人混みの中でよく見つけたね」

「まあな。そつちは?」

「取れた。最後の一部屋だつたケドね」

肩を竦め、渡された鍵を目の前に掲げてみせる。プレートと鍵が

ぶつかり合いチャリ、と軽く音を立てた。

「上出来」

シェリックは唇の端を持ち上げる。その仕草をしても、皮肉っぽく見えないから不思議だ。

やがて、グラスが一つ運ばれてきた。

それぞれを手に取る。

「じゃ、とりあえず」

「お疲れ様、だな」

無事に着いた事への感謝とお疲れ様の気持ちを込めて。合わせたグラスが、涼やかな音を鳴らした。

「ふう。食べた食べた」

ラスターは奥のベッドに倒れ込む。思つていたよりもずっと柔らかい布団で、程良い弾力が押し返してきた。

「ふわ、ふかふか……」

お口様の暖かい香りが鼻をくすぐる。

きっと、いつでも客が来て良いように毎日干されているのだろう。

「それは良かつたな」

甘い誘惑に負けてこのまま寝てしまいそうになり、慌てて身を起こしてベッドの上で胡座をかいた。隣のベッドではシェリックが足を組んで座っている。

「何見てるの？」

「ん？ これか？」

部屋に入るなり読書を始めたシェリックに、声を掛けてみる。本 자체はそれ程大きくなく、表紙に何も書いていないので、何の本だかさっぱり分からぬのだ。

「歴史書だよ」

ちらりと顔を上げて答えた。

「歴史書？」

鸚鵡返しに尋ねると、シェリックは頷いてみせた。

「今この辺りのことも知つておきたいからな。何せ、昔の知識しか持ち合わせていねえから、さっぱり分からん」

「あはは。そりやそうだ」

道理で。

それで納得した。

普通に暮らしを送つてきた者なら、いくら歴史に疎い者でも現在の事なら少しばかり分かるだろう。だが、シェリックは長い間世間と外界から切り離された暮らしを強いられてきたのだ。

あんな狭い牢獄の中、ましてや世界の片隅にあるところに大した情報が入つてくるとはとても思えない。

それに、そこから出たのがつい一、三年前だ。まだ全てを把握しているわけではないのも当然の事。

だから町に寄つては度々こうした本を買つたり貰い受けたりして、現在の情報を集めているのである。

「前から思つてたんだけどさ、シェリックは何で歴史を知りたいの？ ボクは全然興味が湧かないんだけど？」

シェリックはちらりと視線を寄せた。

「そりゃあ話が通じないことはあると思うケド、誤魔化せば大丈夫だと思うよ？ 自慢できるコトじやないケド、ボクは政治とかよくわからぬし」

本を持っている手を下に降ろし、考える素振りをした。

「まあ、何て言うか 痢だな。これは、昔から世界中の情報を集めていたからだと思うぜ」

再び本を読み始める。

「へー」

大して感心がない事が呟きに出ている。かと言つてシェリックがそれを咎めることがなかつたが。

ラスターは、シェリックが本を読んでいる様をじつと見つめた。考えてみれば、シェリックのことはあまり知らない。今分かつて

いる事と言えば途方に暮れる程の長い間牢獄に入れられていた事と、決して方向を間違えることのない旅の心得を持っている、というそれだけだ。

何故牢屋に入れられたことになったのか、それより以前に何をしていたのか、お互いに全く知らないのだ。

そう。その点に関しては、自分も同じだ。何となく互いを詮索してはいけない気がしていた。

(秘密の方がおもしろいし?)

そんな楽観的な考えがあつたことも含まれているが。

「どうかしたか?」

視線が気になつたらしく、ショーリックは本から顔を上げた。

「ううん、考えゴトしてただけ。先に寝るね」

胡座を解いてもそもそもぞと布団の上を這ひ。

やはりふかふか感は変わらない。

「明日、早いからな」

「ん。おやすみ」

布団の中に潜り込む。

「……」

そこで、重大なことに気づいた。

(蒸すかな)

浮かんだ疑問を振り払い、半ば無理矢理目を閉じる。

初めは眠ろうと頑張っていたがどうやら疲労は本物だったらしく、その証拠に眠りはすぐに訪れてきた。

特に抗う必要はない。ラスターは心地良い眠りの中に引き込まれて行つた。

再び静かになる。さつさと布団を被つてしまつたラスターの方から、微かな寝息が聞こえてきた。

「　　さて」

一度背伸びをして早々に寝てしまったラスターを見る。昼間の疲れの為か、起きる気配は全くない。

(なら、大丈夫だな)

ショーリックは読んでいた本に繋代わりの紐を挟み、座つているベッドの枕元に置いた。

極力音を立てないように気をつけて、支度をする。まあ、特に何もないが。

部屋の電気を消し、部屋を出ると、そのまま立停止まつた。

「おやすみ」

「こ……寧に振り返つてから中に向かつて小さな声で言つて、ゆっくりとドアを閉めた。僅かに入ってきた光がなくなる。

既に眠りに就いていたラスターには、彼の言葉は聞こえない。夜の静寂が訪れた。

3 訪れた陽、再会の朝（前書き）

迎えた翌日の朝。ラスターが出会った青年はショーリックの知り合いで…。

3 訪れた陽、再会の朝

ルパの町の漁業は朝が早い。

それには理由があり、遠くの海まで出かけていくのに船出が遅いと町の主産物である回遊魚が全く獲れなくなってしまうからだ。遙か遠洋の方まで行く船もあり、漁師の家族は皆やきもきしながら待つてゐるのである。

そんなわけで、夜明けの日覚ましは鶏ではなく船の汽笛だ。遠く長く、やうに深く低く響く汽笛の音は、どこか寂しさを感じさせる。

今日もまた、一隻の船が出ていく。

ラスターは窓にもたれながら出航していく様を見ていた。

まだ夜明け前で辺りは薄暗い。町のあちこちにぼんやりと明かりが点いている。これから仕事を始めるのだろう。

欠伸をかみ殺しながら、昨夜シェリックが『明日は早いぞ』と言つていたことを思い出す。

シェリックが『早い』と言つたのは行動ではなく、町の習慣だつたのかも知れない。

確かに、町中に響くこの音なら起きない者はほとんどいないだろう。ラスターも起こされた者の一人だ。

もしかしたらシェリックもその内の一人なのだろうか。

昨晩先に寝入ってしまったからその後のことは知らない。

隣のベッドに彼の姿がないのは、汽笛が鳴るよりも早く起きたか、どこかへ出掛けたまま戻つてきていなかいかのどちらかだろう。

「……」

頬をほりほりとかく。

(出でいったことにも気づいてなかつたからなあ……)

すたすたと歩いてから布団に突つ伏し、暫くして起き上がる。

もう少し寝たい誘惑はあつたが、町中を見て回りたい気持ちもあ

つた。何せ昨日はあまりの空腹と疲労でこの宿屋に直行してしまった為、町を全く見ていないのだ。

(あの店とあそこの店、それからあっちにも行きたいし)

それに。

袋の中を調べて深々と溜息を吐く。

(そろそろ仕入れ時だしね)

腰の辺りに小さな袋を括り付ける。

「よしつ」

外出準備、完了。

ベッドの脇に転がっていた棒を持ち、ドアを開けた。

「うわ、寒つ」

朝独特の肌寒さに身震いをする。

(やつぱ上着も欲しい)

鍵をかけるかどうか悩んだが、特に盗られそうな高価な物は持っていないので開けたままにしておくことにした。

「ショーリックが戻つてくるかもしれないしね
うんうん。

頷いて自分に納得させる。

階段を下りていくと、階下から人の話し声が聞こえてきた。

これから仕事に向かう町の人達かと思ったが、違うかもしない。

(だつて、この声　　)

その中に、ショーリックの声も混ざっていたからだ。

昨日の喧噪とは程遠い静けさの中、食堂の片隅には一人の男性が

座つて話していた。周りに他の客はない。まるで貸し切りの店のようだ。

「まあ、大変と言えば大変だつたか」

一人しかいないだけあって、普通に話していくても部屋の端まで聞こえてくる。

「曖昧だなあ。お前、やっぱ昔から全然変わつてねえわ」「そいつはどうも」

酒が入っているグラスを、手の中で弄ぶ。

「しつかし、お前が牢にぶち込まれると聞いた時は度肝抜かされたぞ。あの中でも数少ない優秀な術者だったお前が、さ。まさかと思つた」

苦笑いで応える。

「なに、誰にでも失敗することはある。俺もその一人だつたって事だ」

肘を突き、目を細める。

「完璧な人間はいやしねえってか?」

「ああ。まさにその通り、だ」

おどけた仕草で肩を竦める。

「そういうや、あんたはまだ城に?」

「そう。まだ城だ。あれだけ長い間いるとそろそろ時間の感覚がなくなりそうだよ」

「おいおい。それを言つたら俺はどうなる

」そこで言葉を切り、視線を奥の方に転じた。

「ん?」

つられて相手も後ろを向く。

こちらに歩いてくる子供が見えたからだ。上から降りてきたという事は、ここに泊まっていたのだろう。

と、こちらに真っ直ぐ歩いてくる子供に、シェリックが話しかけた。

「起きたか」

「うん。汽笛で起こされた

えと……」

ラスターはシェリックの向かいに腰掛けている男性を見た。黒の長いローブを着て、胸元の銀色の飾りで止めている。

飾りには何か緻密な模様が見えたが、何の模様かは分からぬ。

「こつちは俺の古い友人のリディオルだ。昔こいつには世話になつ

てな

シェリックの言葉に目を見開き、男性の顔をまじまじと見た。

「ボクはラスター」

「よろしく

差し出された右手におずおずと握手を交わす。

「ラスター、お前今から出掛けのか？」

外出準備の出来たラスターに目をとく気づいた。

「うん。この町の漁に行く人の為に開いてる店とかあるんじゃない
かと思つて。シェリックは？」

「俺は積もる話があるからな。遠慮なく行つてこい

向かいのリディオルをちらりと示す。

「分かつた。じゃ、行つてくる

ラスターは一人に背を向け、出口に向かつていった。

店を出ていったラスターの後ろ姿を見送つたところで、シェリックが再び口を開いた。

「悪いな。あの通り敬語の知らん奴だ」

「気にしてないさ。それに、お前に連れがいたとはな。最近の坊主
にしては威勢のいい奴じゃないか

……『坊主』？

グラスを傾けた手がぴたりと止まる。

「おい、若干語弊があるぞ」

「ん？」

シェリックに指摘され、やがてああ、と思い当たつたようだ。

「ひょつとして『嬢ちゃん』かい？」

リディオルに頷く。

「ああ。あんな格好してるとてもそつは見えんがな
初めて会つた時から変わらない、男物の服に活発そうな目。女つ
気がない行動に、加えて一人称が『ボク』ときた。

「いや、あの子の気持ちが分かる気がするぞ」

「ほう。どんな？」

興味深げに尋ねてみる。

「旅をするのに”女”だと色々不便があるだろ。腕力然り、職業然り、だ。”女”だから、というだけで随分甘く見られるらしいからな」

「確かに」

リディオルに同意する。

世の中には性別差別や職業差別は当たり前のようにある。

一目で分かってしまう職業の規則のこともあるし、見た目だけで判断されるケースも少なくはない。

比較的な名の知れた者ならそういうことはないだろうが、それでも最初の頃は苦労していただろう。

「だが、あいつが本当にそれを分かつているかは知らん。服も、単に動きやすいから、と言つてたしな」

『え？ だつて動きやすいし』

前に何故男物の服ばかりを着ているのか、と尋ねた時、ラスターからそんな答えが返ってきたのだ。

「何も知らずにドレスを着たまま旅に出ようとする世間知らずのお嬢様もいるくらいだから、常識ぐらいは分かつてるんじゃないかな？」

旅の、常識。

「まあな」

シェリックは再び苦笑いを零した。

4・港町ルバの人々（前書き）

一人町へと出かけたラスター。出会ったのは町の人々と歴史、そして先へと続く情報の在処だった。

4・港町ルバの人々

宿屋を出て一人町中を歩くラスターは早くも後悔していた。

海から吹いてくる風が思つた以上に冷たく、今着ている服では完全に防げないからだ。

以前買つた、何処かの町からの輸入品の保温性・風避け抜群のローブはどうの昔に売り払つてしまつて、今は手元にない。

今後の為に何か買つておいた方がいいだろうか。

(情報集めたらすぐに出発だよな……)

ちらりとシェリックといたりディオルの事が頭をよぎる。
そんなにすぐではないかも知れないが、何か買つておいた方がいいかも知れない。

備えあれば憂いなし、だ。

(コレ、東国と言葉だっけ?)

頭を捻るが答えは出でこない。

港の方へ下つて行くと、ちょうどいところで服屋を見つける事が出来た。

(ラッキー)

自分の幸運を喜びつつ、軽くなつた足で歩いていく。

入口の横には服を象つた看板があり、とても分かりやすい店だった。

(ん?)

[…]

じー。

近くで田を凝らしてよくよく見てみると店の文字が立体的に彫られていて、誰かの手製の物であることが伺えた。

看板と言えば、有名な店では職人芸の物が多い。

しかし、ここのかの看板は職人の技術は見られず、ところどころ歪な形に仕上がっている。そう言つた意味では完璧な職人芸の看板の方

が見栄えはいいが、こちらの方がなんだか親近感を感じる。完璧でない分温かみが備わっている感じがする。

思わず笑みが浮かんできた。

服型の珍しいお手製の看板に暫く見惚れた後、店のドアを押してみた。

明かりが点いていないのでまだ開いてないのかと思いつきや、ドア自体は簡単に開いた。

「わあ」

驚きつつも恐る恐る中に入る。

店の中は薄暗く、人の気配がない。ドアが開いたからと言つて店が開いているとは限らないし、誰もいないのだろうか。

「すいませーん……」

しーん。

「……」

てんてんてん。

中に向かつて声を掛けてみるが、返事は返つてこない。

「誰もいないのかな。すいませーん！」

もう一度、今度は前より大きな声で叫んでみる。すると。

「はーい！ ただいま！」

奥から若い女の人の声が返ってきた。

こちらに走つてくる音がし、途中で止んだと思つたら明かりが点いた。そこで初めて店の中が露わになる。

外見から分かるように店内はあまり大きくなく、こちんまりとした店だ。町の位置的なものと気候の関係で、風避けの服が思つていた以上に置いてあつた。

その他にも普段着用の服や漁師の人人がよく着用している服、旅人用の服や貴族の高価な服まで置かれている。中でも特に目を引いたのは、店の隅に飾られていたボロボロの海賊の服だった。

屈んで眺めてみる。

「

相当古いものらしく、あちこちが破れていたり汚れていたりして、それらの裂け目の周りには何やら黒ずんだものがあった。

(コレ、ひょっとして血の跡……?)

その推測は外れていないうような気がした。服に付いている中では左胸の穴が最も大きく、どす黒く変色している。

もしもこの黒いものが本当に血であったなら、この海賊は壮絶な最期を遂げたことになる。しかし、何故こんな物騒なものが服屋にあるのだろうか。服であること間に違はないのだろうが、どう考えても似つかわしくない。

(単なる趣味とか)

有りづる。

「……それはね、命を賭して戦い、この町を救つた英雄が亡くなる時に着ていたものよ」

ラスターの疑問に答えるかのように返つてきただのは、先程奥から聞こえてきた声と同じだった。

海賊と言えば、海の霸者であると同時に略奪者でもある。噂でしか聞いたことはないが、その海賊が『英雄』?

「海賊が英雄なの?」

思つたままの疑問を口にする。

「そうよ。ヴェノム・サークっていうんだけど、聞いたことない?」

「ない。初めて聞いた」

「そう? この町では知らない人がいないくらい有名な人よ」

彼女は胸を張り、誇らしげに言つた。

「……あ。」

ぱん、と音を立てて胸の前で両手を合わせる。

「『めんなさい、おしゃべりが過ぎたわ。何をお探しですか?』

一度ペコンとお辞儀すると、口調はすっかり店員のそれになつていた。

「えーと……風避けの、出来れば他の国でも着れるような服つてあ

る?」

「ありますよ。あなた、ひょっとして旅の方?ついでとばかりに彼女は尋ねてきた。」

「うん。そうだよ」

頷いて答える。

「やっぱり。この辺りじゃ見かけない服装だし、ルパは他の大陸にも渡れるからね」

ラスター達も一応田当ては船だ。

ルパから出ている漁船や貿易船ではなく、人を乗せて運ぶ客船。行き先は主に隣国のアルティナ王国だ。

ラディラ共和国が島国なのに対し、アルティナ王国は巨大な大陸の一部で、たった一部とはいえ国の広さはラディラとは比べものにならないくらい大きい。

「一人旅?」

「まさか! もう一人は宿屋でお留守番」

「じゃあ、一着探しした方がいいかしら?」

店員の少女はくすくすと笑い、探していた手を止めて一度振り返つた。

「うん、お願い」

ラスターが返事をすると「了解っ!」といつ元気な返事が返ってきて、すぐさま探し始めた。

「ありがとう」ゼロしました!」

少女の明るい声を背に店を出ると、町中の様子は活気溢れたものに変わりつつあった。

「んー」

ラスターは荷物を持って歩きながら考えた。

色々なところに寄りたい気持ちはあるけども、ここで無駄遣いをするわけにはいかない。

(とりあえず必要なものだけ確保しておいて、後はそれから考えよ

うか)

「ん？」

視界に何か青い色が映った。

顔を上げたラスターの目の前に、境目が分からぬくらい真つ青な海と空が入り交じりながら広がり、辺り一面に名も知らない白い鳥が飛んでいた。

「うわあ！」

初めての光景に、ラスターは感嘆の声を上げた。
考え事をしているうちにいつの間にか港まで来てしまったらしい
が、そんな事はどうでも良かつた。

鮮やかな白と青の調和する世界。例えて言つなら流れる雲のように、夜空に浮かぶ星のように、しんしんと降り積もる雪のように。
上手く言葉には出来ないが、そんな光景が目の前に広がっていた。

「よお！ ここいらじゃ見かけない顔だな！」

声は下の方からした。

「お前、海見るのは初めてか？」

大声で、こちらに声が届くように喋っているのは町の漁師だった。
たつた今戻ってきたところらしく、漁師の足下に放り出されてい
る網の中の魚がまだ大量に飛び跳ねている。

「うん、初めてだよ！ こんなに広いとは思わなかつた！」

負けないくらいの大声を張り上げた。

またもや大声が来る。

「海は広いさ！ 外に出ればもつと広いことが分かる！」

「だろうね！ ここから見える限りでも十分広いと思うケド、一面
海になるコトもあるんでしょ？」

それを聞いた男は顔を綻ばせた。

「おう、その通りさ！ お前も一度船に乗つてみるといい！ 海の
偉大さが分かるぞー！」

「そのうちね！」

苦笑いをした。

この喋りの進み方から言って、何となく「今から乗れ！」とか言
われそうな気がしたのだ。

「必ず一度は乗れよ！ 海はいいぞ。」

「うん！ じゃあ

手を振ろうとして、その動作を止める。ふと思いついたことがあ
つた。

「ねえ！」

「ん？」

仕事を再開しようとしていた男は手を止めてこちらを見上げる。
「ここいら辺で漁師がよく集まる場所ってある？」

「漁師が集まる場所？」

首を傾げ、上を向いて考える素振りをした。

「そうだな……灯台の近くの飯屋か酒場だと思つぜ。ほかの奴らはどうか知らんが、俺は良く行く！」

灯台ということは、港の海沿いを歩いていけば着く筈だ。

「ありがとう！」

「いいつてことよ。じゃあな！」

今度こそ大きく手を振り、ラスターは灯台の方に向けて歩き出しだ。

5・得た情報と先への道

町の灯台は遠くから見ても大きいのは重々承知していたのだが、近くで見た時にはまた違う”大きさ”というものがあった。

「首痛くなりや……」

下から見上げると天まで届きそうな程高い。長い間海風に晒され続けているせいか、海側を向いている方元は白い壁であつただろうが剥げて、灰色の石の色が見えている。

「この辺の筈なんだケド」

その横を通り過ぎ、きょろきょろと辺りを見回してみると、すると、町から少し離れたところにぽつん、と一軒の小屋が建っているのに気づいた。

(あれかな?)

あばら屋ともいつて良いくらい粗末な小屋の方へ、てくてくと歩く。中に入がいるのかも怪しかつたが、近づくにつれて声が聞こえてきた。

機嫌の良さそうな笑い声。

ラスターはその賑やかな小屋の前で一度立ち止った。

「……」

おそれなくここが、漁師が言っていた『飯屋』ではなく『酒場』だろ。酒場と呼ぶ割にはやや古ぼけた小屋で、漁師よりもその辺のごろつきが集まつていそうな場所だ。

町外れに位置する場所。服屋の周りと比べると寂しい風景だ。周りにはおらず、町の人も滅多にここへは来ないのでないだろうか。

(ま、いいか)

しばらく悩んだが、結局は両開きになつてゐる小屋のドアを押し

開けて入ることにする。開けた途端、小屋の外まで聞こえていた笑い声が耳を聾した。

「……っ」

片手が塞がつてゐる為に耳栓は片方しかできない。当然片方だけで防げるわけではないのだが、今は仕方ないだろう。何せ、先程会つた漁師の船から考えてみても、今回の漁は大量だつたようだから。店の中は、外見に比べるときれいだ。騒いでいるほとんどが漁師とおぼしき人々で、今のところじろじろつきの類は見られない。

（ふーん）

ある程度中を見渡して、比較的静かな奥のカウンターへ行く。テーブルの席程ではないが、人はそこそこ座つていた。

「おう、らつしゃい。こりやあ珍しいお客様さんだ」椅子に座ると髭面の大柄な男が話しかけてきた。

「何にする？ 見たところまだ子どもに見えるが？」

からかい半分で言われた言葉に微笑で返す。

「うん。『子ども』だよ。ファイなんてある？」

ラスターの返事が意外だつたのか、男は軽く目を見開いていた。

「こいつは驚いた。あんた、肝つ玉座つてるな」

「そう？」

この答えは白々しいかもしれない。

そんなことを思いつつ。

「あー、と。ファイだな？ ホットでいいか？」

「ん」

ファイとは、何処の国でも育てられているミユッファアという家畜の乳だ。余談だがラディラ共和国にもミユッファアの牧場があり、ラディラの大抵のミユッファアはここで飼育されている。

ファイの色は乳白色に淡い黄色がかかつたような色で、ほんのりと甘い味がする。栄養も満点だ。特に、育ち盛りの子供には欠かせない飲み物だと言われている。

ラスターが椅子に背を預けると木の軋む音がした。

(これからどうするかな)

ファイを飲み終わつてすぐに戻つてもいいのだが、シェリックが言つていた『積もる話』とやらはまだ終わらないだろう。そんなところに戻つても邪魔になるだけだ。

(でも買い物終わつてないし、ここでなら情報集められそうだし)何とかなるか。

「はいよ。熱いから氣いつけてな」

「ども」

渡されたカップからは湯気が立ち上つてゐる。少し冷ましておいた方がいいかもしね。火傷するのはごめんだし。そんなことを考えていると声がかかった。

「ところで、お前さん一人か？ 連れは？」

髭面の男だつた。こんなところに『子ども』が一人で来たことに興味を持つたようだ。

「ボク一人だよ」

「度胸あるなあ」

感心したのかしきりに頷いてゐる。

酒場のマスターだからもつと荒っぽい人を想像していたのだが、そんなことはなかつたようだ。

「ねえ、おじさん。ちょっと訊きたいことがあるんだケドさ」

「何でも訊いてくれ」

すっかり機嫌をよくして耳を傾けてくる男に、ラスターは頬杖を突いて言つた。

「”忘却の島”への行き方知らない？」

次の瞬間、男の顔色がみるみるうちに青ざめていった。

「ぼ……忘却の島だと！？ お前さん、本当にあんなところ指してるのが…？」

口をあんぐりと開けた男の反応を落ち着いた目で眺める。

「うん。悪い？」

「悪いも何も、あそこは……」

男は言いにくそうに口ごもった。

「知ってるよ。多くの人が幸せを求めて旅立ち、そして誰一人帰つてこなかつた、っていうトコでしょ？”忘却の島”って名前はそこから付いたんだよね。本当の名前は知らないケド」

男は啞然としていた。

「あ、ああ、そうだ。俺も口伝でに聞いただけだから詳しくは知らないが」

じ、と見られる。

「お前さんは、一体何しに行くんだ？」

当然の疑問だろう。

「何つて言われてもなあ……」

うーん。

ラスターは頬をかいた。

しかし、考へても仕方がない。ラスターははつきりと

「わかんない」

と言ふと、

「おいおい。好奇心だけで行くなら辞めておきな。死に行くようなもんだ」

眉根を寄せて言われてしまった。

困つてしまい、頬を搔く。

「んー、大した目的はないんだけど、何となくそこには決まつたって感じかな」

今から一ヶ月と少しばかり前。

『ねえあんた達、”忘却の島”って知ってる?』

旅の途中で見知らぬ女性にそう話しかけられ、そこで初めてラスター達は”忘却の島”的存在を知ったのだ。

長年隔離されていたショーリックは勿論のこと、ラスターでさえも知らなかつた。

そこへ行こう、と決めたのも、たかだか一ヶ月前の話だし。

「そんなに死にたいのかい?」

心配を通り越して呆れ果てた、という口調だ。

ラスターは首を振った。

「ううん。ただはつきりとした目的が欲しかったんだ。いつまでも宛てのない長旅だと、いつか何処かで野垂れ死んじゃうでしょ？」

「……お前さん、早死にするタイプだな」

「そう？ 悪運は強い方だけど」

頬杖を突き、笑いながら喋る子供を見て男は思つた。度胸と気構えは人一倍ある奴だ、と。

「そだ。コレいくら？」

持ち上げたカップの中にはまだ少量のファイが残っている。「いらねえよ」

「え？ いいの？」

聞き返すと、男は嘘でないといつぶつに頷いた。

「おお。お前さんに免じて今回はタダにしてやる」彼の気前の良さに、ラスターの顔がぱっと輝く。

「やつた！ ありがと！」

「いいくてことよ。ただし、次に来たときは払えよ？ 一杯5ロンド」

「ん。わかった」

残りを一気に飲み干すと、荷物を持って席を立つた。

男と話しながら周りに聞き耳を立てていたが、漁師達の話題の中には役立ちそうな情報はあまりなかつた。情報らしい情報は入らないかもしれない。ラスターはそう思った。

「ごちそーさま。また来るね」

「おう。待ってるぜ」

そのまま出ていこうとしたら、カウンター越しに腕を掴まれた。

「つわ！？ なに？」

驚くラスターに、男はひそひそ声でこう言った。

「最近耳にした噂だが、王国の奴らが忘却の島の調査をする為の団体を集めてるらしいぞ」

「王国つて、アルティナ？」

とつさに思い浮かんだのはまだ見たことがなく、話でしか知らない海の向こうの大きな国。

「そうだ。王国の奴らなら何か知っているかもしれん。アルティナまでは、こここの港から出でる客船で行けば着くぜ」

「客船……アルティナか。ありがと」

掴んでいた腕を放すと、男は白い歯を見せて笑った。

「どういたしまして。どうせ行くなら、生きて戻つてこいよ

「もちろん」

死ぬつもりはさらさらない。

「戻つて来たらここに来るよ

「そうか？」

男は笑顔で応えてくれた。

「待つてるぜ」

彼と約束をし、ラスターは入ったときと同じように扉を押して外に出た。

「わっ！」

途端に風に煽られる。

海から吹いてくる風は、前よりも少しばかり暖かかった。

しかし暖かいと感じたのは店を出たすぐ後だけで、外の海風は相変わらず冷たかった。ファイを飲んでいたおかげか身体だけはぽかぽかと暖まり、しばらくの間気持ち良いとさえも思える風を感じていた。

「アルティナ王国」

未だに現実味が薄いその国名を、口に出して呟いてみる。

『王国の奴らが、島を調査する為の団を集めているらしいぞ』

酒場にいた髭面の店員はそう言っていた。

単なる噂の類に過ぎないし真偽の程が分からぬ話だが、確かな情報であることに間違いはないと思つた。

ラスターは今まで一度も他の大陸へ渡つたことはない。海を見た

」とも初めてだ。だから、今いるラティナの「こと以外はほとんどの一つ知らないと言つてもいい。

もしも彼が言つていた噂が嘘だつたとしても、そのアルティナ王国で別の情報を集めればいい。ずっとここにいただけでは、これら先のことが何も見えてこないだろつ。

ラスターはまだ、何も知らない。

おそらく今は、”世界”という巨大な情報の一欠片すらも分かっていないのだろつ。

腕を真っ直ぐに伸ばしてみる。

「遠いな」

口で紡ぐと、実感できるような気がする。

海を臨み、遙か遠くの国に思いを馳せる。

アルティナ王国。

水平線の先にある別の大陸。昔はこの国の他には何もないのだと思つていた。

ここからでは見えないけれど、実際に見たことはないけれど、確かにあることだけは分かる。

移り変わる時代の積み重ねが、人々を海の向こうへと送り出した。どんなところなのだろう。ルパよりも広いのだろうか？見たことがないものがあるのだろうか？ 聞いたことがないものもあるのだろうか？

逸る気持ちを抑え、手を下ろして港から離れた。

きっと後で、近いうちにここに来る。この港にやつて来る。

(絶対に)

何故かそう確信できた。絶対にここへ来ると。

今度は、シェリックも一緒に。

6・浮かび上がる疑問

「 つと、もうこんな時間か」

思つた以上に長い時間世間話に興じていたらしく、気がつけば店の時計の針は正午近くを指していた。

「なかなか帰つてきこないもんだからすっかり長くなっちゃったな。客も増えてきたことだし」

シェリック同様にリディオルも周りを見回して呟く。

「 そうだな。ひょっとすると、嬢ちゃんに氣い使わせちまつたかもしないな。悪い」

「 気にするな。あいつはあいつで買うものがあつたようだし。俺らが気にすることじやない」

「 そうか？ お前の連れだろ？ 冷たい奴だな」

リディオルは卓の上で長い指を組んだ。男性にしては色白で、ともすれば簡単に折れてしまいそうな細い指だ。

「 旅の連れだろうが何だろうが所詮は赤の他人だ。あいつは俺の家族でも何でもない」

突き放した言い様に、リディオルは眉を顰めている。

「 それを言つたら家族以外は全員赤の他人だぞ」

友人であろうと仲間であろうとそんな事は関係なく、全てが一括りに出来てしまう程希薄な関係。それで良いと思っている自分が居る。

「 少なくとも俺はそう思つてる。ラスターと出会つてから三年近くなるが、あいつの事は何一つ知らないのと同じだ。互いの事は干渉しないのが暗黙の了承でな」

特に決めたわけではない。いつの間にか決められていた事だ。

「 ジゃあ、何故お前があんなところに入れられたのか知らないで助けたのか！？」

短い間絶句した後、リディオルはシェリックに詰め寄つた。

ちなみに『あんなとこか』とは、他ならない最果ての牢屋の事。

「ああ」

信じられないというふうな表情でこちらを見ている。

「呆れるくらい能天氣だな……」

そう言いたくなるのも当然か。何も知らない者が今の話を聞けば、ラスターは『脱獄を助けた者』と認識されてしまうのだから。

看守があまり様子見に来ない上に半ば死体置き場と化していたのだが、シェリックがいたところは”立派な”牢屋だ。要するに彼は今、世間で言う『脱獄犯』なのである。

だがそれはあくまでも”事情を何も知らない者が聞いたたら”、の話。事情を知っている者が聞いた場合、そこには新たな解釈が生まれてくる。

「だからか……」

ふう、と息を吐いたところを見ると、釈然としなかつたところを無理矢理納得させているように思える。

「そんな得体の知れないお前がよく連れ出されたな。看守の目が浅いとは言え」

「あそこの見張りは数年に一度来るか来ないかだったからな。その点に関しては問題なかつた」

「そうか」

一度彼らの間の言葉が切れる。

しかし、その沈黙は長くは続かなかつた。

「なあ、何で嬢ちゃんはお前のところに行つたんだ?」

思案顔でいたりディオルは、唐突に根本的なことを尋ねて来た。しかしラスターではないシェリックには知る由もない。何故助けられたかなんて、こっちが訊きたいくらいだ。

それに、シェリックがいたのは牢屋。子供がそう簡単にホイホイと入つて来るようなところではない。

「雨宿りと見てたが」

「雨宿り? 近くに村があつたのにか?」

「……村？」

今度はこちらが訊き返す番だった。

そういうえばあの時、ラスターは自分の村を出てきたと言っていた。
もしかしたら、そこがラスターの村だったのかもしれない。

『ないものに帰れって言われても』

確かに、そんな感じの事を口にしていなかつただろうか。

「知らないのか？ 地理は得意分野だつただろ？」

「いつの話だ」

懐かしい単語に思わず苦笑した。以前も良くこんな感じで話をしていたなど、思い出す。感慨に浸るなんてらしくもない。きっと、ここで彼に会つてしまつた事が運のツキだつたのだろう。

「ああ。いくらお前でも最近のことは知らないか」

何か引っかかる言い方に身を乗り出しかける。

「おい、それはどういう

」

シェリックは、はつとして口を噤んだ。リティオルが目線で入り口の方を示したのだ。

「……」

そのまま黙つて待つていると背後から元気な声が降つてくる。今話をするにはタイミングが悪過ぎたのだ。

「ただいま。町中歩き回つてお腹ペコペコだよ」

「遅かつたな」

気づかないふりをし、ようやく後ろを向いたシェリックが見たものは両手いっぱいに荷物を抱えたラスターの姿だつた。今までに話題の中心だつたという事はおくびにも出さず。

「早く荷物を置いてこい。その様子だと、皿は食べてないんだろう？」

「？」

「うん。おじさんファイを奢つてもらつたケドね」

「そうか。ほら、何か頼んでおくからとつとつと行つてこい」

「はーい」

ラスターは返事をして奥の階段へと歩いていく。荷物を持つ後ろ

姿がどうも危なっかしいが、うまくバランスを取つていて運ぶの自体は器用だ。

「お前、この後はどうするんだ？ 王国に渡るのか？」

「そう尋ねるとリディオルは頷いて言った。

「ん？ あ、ああ。こっちに来たのは単なる様子見でね。お前に再会できたのが一つの収穫だったか」

「そりやどうも。お世辞を言つても何も出ないがな」

「初めから期待するだけ無駄、じゃねえか？」

薄く笑みを刻んだ。

「よく分かつてるじゃないか」

「そりゃあ昔のつき合いだからな。多少なりとも理解はするわ」
リディオルはそこで浮かべていた笑みを消し、眞面目な顔をして

言った。

「それで、お前は？ また戻つてくるのか？」

「……」

潜められた声。そう来るのは何となく察しがついていた。

「馬鹿言え。俺が戻れるわけがないだろ。あの事で投獄された俺が、もう一度使われるとは思えん」

ふとした拍子によぎる彼女の後ろ姿。鮮血に染められた、栗色の長い髪。あんな最悪な形で事を起して、切り離せざるを得なかつた人間なんて

「俺らは必要としてるぞ」

はつとした。知らず知らずの内に感傷に浸つっていたようだ。本当に、らしくない。

リディオルは昔と変わらない口調で言つたくれる。その事に少しばかり感謝して。

「いくら必要とされても、奴らは”名前”と”名誉”を第一に考える。そんなところに俺が戻つたら汚名が付くのは必至だろ。奴らにしてもそれだけは避けたいんじゃないのか？」

困ったように笑つたところを見ると、凶星だったのだろう。昔か

ら変わらず、だ。

「否定は出来ねえよ。俺のこの身も今は城のもんだしな。一個人の、しかも下級の学者の言い分なんざ通るとも思えねえ。だがな、俺らには知識が必要なんだ。今はその気にならんでもいい。頭の隅にでも留め置いてくれ」

「ああ」

互いに避けていた会話によつやく区切りがついたといひで、ショリックは何か頼むべく店員を呼んだ。
そりそろラスターが戻ってきてしまつから。

「……ふう

音になるかならないかの瀬戸際のような声で呟き、シェリックは足を組み直した。

今、食堂でラスターを待ち続けるのはシェリックだけ。もう一人はとつくのとうにいなくなつていた。その例の人物、リディオルは、暫く振りの休みだから羽を伸ばしてくる、と言つて何処かへと行つてしまつたのだ。

今までの話を聞く限り長らく城に籠もりきりだつたようだから、彼からしてみれば良い休暇となることだらう。

そこまで考えて自分も町中を見ていなことに思い当たつた。ここに来てからまだ港へも行つていない。どうせなら後でラスターを連れて行つてみようか。たまには散歩に出かけてみるのも悪くない。このところ歩き通しだつた為、ゆっくりと景色を眺めている暇もなかつたのだ。

頼んだ料理が大方運ばれてきた頃、こちらに向かつて来る気配に気づく。パタパタと小走りで来る音に顔を向けた。

「あれ？ もう一人は？」

ようやく戻ってきたのラスターは、開口一番にじう尋ねる。減っている人数に首を傾げて。

「町を見ると言つて少し前に出でていったが。お前にようじくとも言つていた」

「ふーん。シェリックは行かないの？」

ラスターはシェリックの向かいの、先程まで丁度リディオルが座つていた席に腰を掛けながら何気なく訊いてきた。

「俺も散歩がてら後で出かけるよ。一緒に行くか？」

「行きたい！」

見事なまでに即答だった。

「実は買い物に夢中であまり見れなかつたんだ。あ、でも海は見に行つたよ！」

「それは良かったな。取りあえず、冷めるぞ」

他にも言いたいことがありそうな雰囲気は漂つていたが、最後に付け加えた一言が絶大な威力を持つていた。旅の途中で食いつぱぐれることも珍しくなかつた為、食べ物に関するでは弱い。

「う……いたします」

ラスターは素直に従いパン、と両手を合わせて箸を手に取つた。

数時間歩き回つたせいか思いのほかお腹が空いていたようだ。止め処なく箸を動かし、とにかく料理を詰め込む。そのスピードは速くもなく遅くもなく、無理して食べている氣配など微塵も感じられないものだつた。

「漁師の人から聞いた話なんだだけじゃ」

卓上の料理の皿が気持ち良いくらいに空になつてきた頃、ラスターはそんな言葉から話を切り出してみた。

「海の向こうのアルティナ王国が島の調査団なんてのを作つてゐるらしいんだ」

「ほう」

短い間を置き、シェリックは先を促すよう言つた。

「ボクの推測だけど、もしかしたら王国の方で何か掴んだのかもしない。情報が独り歩きしてゐるって可能性もあるケドね」

あくまでも憶測に過ぎない。ラスターは酒場で聞いたことを言つてるだけなのだから。

「それで？」

「お前はどうしたい？」

ラスターには言外にそう言つてゐるように聞こえた。判断はそちらに任す、ということだ。緊張が喉元からせり上がり、思わず息を飲み込む。

「無駄足になるかもしれないケド、アルティナまで行つてみたい。

大陸が違うからボクが知らないコトも分かるんじゃないかと思つてさ。それに、ここから王国行きの船も出ることだし丁度いいかなつて。

「ね、どう?」

「アルティナか……」「

アルティナは、港町ルパから最も近いところにあり、世界でも最大級だと言われている王国だ。『アルティナ』は王国の首都の名前でもあり、町自体、都、と呼ぶにふさわしい大きな町である。その広さだけでなく、交易、商業、学術、人口、軍事力等、どれをとっても十分上位に君臨しており、強大国の名は伊達ではない。

現在、交易に関してはルパの他にも様々な国と交易を交わしており、世界の中でも有名な都市の一つに挙げられる。

多くの色々な分野での中心とも言え、今やアルティナなしの世界は考えられないだろう、とさえ言われている程なのだ。

「手がかり、だからな」

「何か言つた?」

空耳かと思い、赤い果実を摘みながらラスターは訊いた。

「いや。そうだな、渡つてみるのもいいか」

「本当! ? 行くのは明後日。ううん、明日でもいい?」

突然ぱっと顔を輝かせたラスターに、シェリックは苦笑を隠せない。

(全く)

嬉しいという感情がありありと見え、ここで反対するのは無粋だと思ったからだ。

「また随分と急だな。王国は逃げも隠れもしないぜ?」

「わかってるよ。早く行つてみたいんだ。アルティナ王国かあ。どんなトコなんだろ……」

重ねた両腕の上に顎を乗せ、考えごとに漫り始める。

アルティナには世界の全てが揃っている。知識も力も、富も権威も。そあいて、その影にある汚さも。

嬉しさを隠しきれない様子を見ていて、シェリックは肩を竦めた。

ラスターが他国に憧れるのも無理はない。ルパの国、ラティラ王国は完全な島国なので、別の国に行くには海を渡る為に海路か空路を使うしか道はないのだから。

しかも現在の世界の技術には空路を渡る方法は皆無があるので、国の往来は海路のみに限られてしまっている。

海路は出来てからまだ間もない。ここ数年間に亘って新天地を求める旅人が急増しているのは、海路の発達があつたからこそのことだろう。

(ここ数年、か)

ショリックにとつてはごく最近のこと。

海路と聞いて、今ではもう朧気になってしまった懐かしい顔が浮かんでくる。

元気でやつているだろつか。

などと考えて息を吐いた。

(これは愚問だな)

あんなに海に出たがっていた人を見ていたから少しは分かる。海を見たことすら初めてのラスターには他の国への熱望があった。海を望んだ者はそれ以上の羨望と苦しみを味わっていたのだろう。

(『アルティナ』、ねえ……)

ショリックは一人、思いを馳せた。

「？」

やけに静かになつた事に気づく。それもその筈。見れば、組んだ腕の上でそのまま熟睡モードに浸りそうなラスターがいた。ここで寝られると非常に困る。何より自分が大変だ。

そう判断を下したシェリックは、無防備に晒している額を軽く小突いてやる。

「あたつ！」

一拍遅れて声を発した後、ラスターは額を押さえながらのそのそと身を起こした。

「むー……なに？」

「なに、じゃない。眠いなり上で寝てこい。鍵は持つてるだろ？」

「んー……大丈夫」

寝ぼけ眼の半目になりかけている奴の言う言葉ではない。「じしじ」と目を擦り、ラスターは夢現はつきりしていない声で言った。

「シェリック」

「ん？」

「シェリックはどうやって船に乗るか分かる？」

『どうやって』？ そんなもの、港に行きさえすれば船の乗り方などいくらでも教えてくれる人はいる。漁師に訊くのが一番手つ取り早い方法だ。

「港に……」

そう言いかけ、ラスターが訊きたい事の意図を察知する。

「ああ、手続きとかか？」

頷いたラスターを見てシェリックは続けた。

「港に行って、客船の手配をしている船乗りに頼めばいい。出港の日にちとかの詳しいことはそこで聞ける」

ラスターは何故かきょとんとしている。

「え。船って、出せない日あるの？」

田をぱちくりとさせていい。本当に何も知らないようだ。

「嵐の日や時代の日は出ないだろ？。後は そうだな、嵐の日も出ないか」

「しけ、と、なぎ、つて？」

(ふむ)

シェリックは腕を組み、遠い昔の知識の辞書を掘り起^レす。すっかり忘れたと思っていたのだが何の苦無く取つてこれた。どうやら未だ健在だったことが知れる。人の記憶とは大したものだと感心ながら。

「時代は嵐と似たようなもんだ。まあ、主に風が強いのが、嵐で、激しい雨が加わったときのことを、時代」と言つか。「嵐」はその逆。風が全くない無風状態の穏やかな日のことだ

「え？」

今ので大分目が覚めたのか、はつきりとした声でこう言つてきた。

「嵐の日も？ 何で？」

「見た目は穏やかだが、実際には船は全く動かない。そもそも船の進行といつのは風が関係してくるからな」

「風……」

「港の方まで行つたんなら気づいただろ？。今まで通つてきた街道よりも海沿いの方が風が強い事に」

「言われてみればそうかも。思つてたよりも冷たい風だった」「だろうな、と頷く。

「どんな船にも必ず大きな布が張つてある。あれは帆と言つて、風を受けて船を進める役割を果たすんだ。使わないときは丸めてあるからまだ張つてはいないか」

ラスターは港に停泊していた船を思い出す。上方にあつた細長い棒に括りつけられていた白いもの。シェリックが言つているのは、おそらくあれの事だろう。

「へえ、物知りだね。ボクには全然解らないコトばっかだ」

感心しきつた風情で唸つてゐる。

「しばらくしたら嫌と言つ程わかる。知りたいと思つたら全部頭に詰め込め。まだ若いんだからな」

「……その台詞、オジサンみたいだよ」「何とでも言つてろ。で、すっかり目は覚めたみたいだな」

ラスターは一瞬目を大きくしたが、すぐに頬を搔いて笑つた。

「そうみたい」

そして、おもむろに背中を伸ばし始める。

「ね、外歩かない？ ほら、食後の運動！」

こじつけじみた理由に苦笑いで応え、席を立つた。

昼時の為か客も増えてきたようだし、なるべく席を空けておいた方がいいだろう。

「あ。ちょっと待つてて！」

ショリックが勘定を済ませてゐる間に大急ぎで上に行き、買つてきたロープを抱えて下へと降りる。そのスピードはいつぞ見事な程だ。

降りてきたラスターの姿を認めて外に行こうとしたショリックの後ろから、その内の一着を差し出した。

「はいコレ。寒かつたから買つてきた」

「準備がよろしいことで」

邪魔にならない店の外でロープを羽織る。
あおがちじゅう

青褐色のロープで、見た目に反して意外と軽かった。

「コレ買ったトコの店の人も言つてたケド、ホント雪山以外ならどこでも使えそう」

ショリックも同じ色のロープを着てゐる。

「同感だ。あまり風通しはよくないから暑い地方では使えないだろうがな」

「その時はその時。臨機応変に行こうよ」

「物は使いよう、だな」

「そうそう」

一人は並んで歩き出した。

9 英雄の海賊

ラスターがさつき通つたところと、全く同じ道を歩いていく。町中は成程、ショーリックの微かな記憶に残るとおりの賑やかさであり、時折一人に向かつて声が掛かつたりした。

路上の店に置いてある魚の生臭い臭いがよく鼻につく。こじらの食材は新鮮である事がうりなのだろう。

服の形に削られた看板が掛かつている店の前まで来たとき、ラスターは唐突に立ち止まつた。

「ショーリック、この町の英雄の話つて知つてる?」

「海賊の話か? 聞いた事はあるが」

昔、大陸などの歴史を学んだ時にそんな話を聞いたことがあった。海賊にして町を救つた英雄とされている一人の男の話を。

「それってどんな話?」

興味津々なラスターにふむ、と頷き、古い記憶を掘り起こし始める。

海の知識といい、海賊の話といい、なんだか昔の知識を思い出してばかりだ。

「確か、今から50年前の話だつた筈だ」

「え……そんなんに新しいんだ。もっと古いものかと思つてた」

「一言で歴史と言つても様々だからな。古いものもあればごく最近のものもあるわ。とにかく、その海賊の話は50年くらい前の話だ」

ぱつぱつと話していくと、次第に記憶が鮮明に甦つてきた

「その頃はルパの町もあまり発展してない時期でな。今みたいに道端に店を開いてはいなかつたらし。船を交易としたのはいいが、その交易船が途中で襲われて積んでいた交易品を奪われる事件が多発してな。初めは船だけで済んだが、町の人たちが手が出さないのをいいことにそのうちにだんだんエスカレートしていつて、ついに

は町まで襲われるはめになつたんだ

そこで一旦言葉を区切る。

「それは、海賊の仕業なのか？」

「ああ。上に英雄とは違つた、がつくがな」

一時期は海に船を出せなくなり、それが済むか済まないかのところで今度は町が襲われたときだ。

相手が海賊と言つこともあつて下手に手を出せなかつた人々にとっては、大打撃以外の何者でもなかつただろう。

「奴らは町中に乗り込んで、残虐の限りを尽くそうとした」

「……」

上がる戦火、町中を逃げ惑う人々、あちこちで飛び散る鮮血
ラスターの脳裏に、そんな光景が浮かんだ。

「その時救世主のように現れたのが

「ヴェノムつて海賊だね？」

シェリックの言葉を継いで言つた。

「そうだ。ヴェノムにとっちゃルパを襲つていた海賊らは、互いに目の敵にしていた邪魔者だつたらしい。広大な海の上の何処で会うかわからない奴らにとつては、ここで潰せるまたとない絶好のチャンスだつたんだろう。ヴェノム達は町を襲つていた海賊達を追い出し、結果的に町を救つた、というわけだ。もしかしたらルパの人達が勝手に救世主として祭り上げてんじやないか、つて噂があるしな」「ヴェノムは名誉を求めてなかつたつてコト？」

「おそらくはな。元々名誉の為に慈善活動する海賊なんざ、いないに等しい。第一、俺と奴らが口にする”名誉”の意味することが違う。う。 ラスター？」

ラスターは突然シェリックの前に回り込み、目の前に人差し指をにゅ、と立てて目を覗き込んだきた。

「？」

「先入観だけで物事を捉えるな。ボクのお祖母ちゃんがよく言つてた言葉なんだ。海賊だからって、全部の海賊が非情な人とは限らない

いでしょう？だから英雄って呼ばれる人達が現れた。違う？

そして、くるりと背を向けて歩き始めてしまう。

「……どうだかな」

ショーリックはぽつりと呟く。

しかし、既に大分前に行ってしまったラスターに、彼の声が聞こえることはなかった。

客船に乗るにはまずは手続きをしなくてはならない。それはルパだけではなく、全世界共通の決まり事だ。

町の象徴でもある灯台近くの建物に、その手続きの為の場所がある。町の人々に始まり旅人や商人、漁をする漁師などの様々な人が毎日訪れているのである。

しかしこれでも客に応じて船を出せるのではなく、出港の日は限られている。そのため、必ずしも希望の日に乗せてもらえるとは限らない。一般的な乗船客ならなおさらだ。

何をするにも階級を重んじており、船に乗る際も例外ではない。民衆よりも貴族、兵士よりも宮廷の護衛兵と、限られた人々が優先になる。それは全てアルティナからの影響で、この考え方は世界中に広まっている。王を何よりも一番に優先しなければならない存在として掲げ、その下に集う民衆がいる。

王は絶対的な存在。

その下で働く臣下は、王の次に連なる存在。

宮廷で働く者が持つ特権は、民衆のそれとは比べ物にならないくらい大きなものだった。

建物の中は待ち合い用の椅子とテーブル、カウンターだけの家具があり、質素な印象を受ける。ここで手続きを受け付けている男性はかれこれ30年近く働いており、一度顔を見せた者は決して忘れないという特技を持つていた。

外見は初老近くの年齢に見える為に初めて来た者に戸惑いを抱かせるが、二度目に訪れた時にはそんな思いもなくなってしまう。

そして、その日の夕方に姿を見せた客は、この店の古株と言える程長いつき合いである常連客の内の一人だった。

「よお。相変わらず陰氣臭い質素な店だな。繁盛してゐるよつには到底見えないぞ？」

「そういうのを大きなお世話と言つのだ。」の若造め

入り口から現れたのは、履いてるブーツに届く程に長い、鴉のように黒く長いローブを着た男だった。

部屋の中が暗いので、彼の姿は部屋の中にとけ込んでいる。

「爺さん、若造はないだろう。若造は」

大仰に肩を竦め、天を仰いだ。

「それもそうだな。ではお主は童顔だ」

「口の減らない爺さんで」

「何を言うておる。そこの童顔の若造よ
ほつほつほつ、と明るく笑い、溜息を吐いている黒いローブの男
に言つた。

「して、リディオルよ。何用で参つた？」

口元に笑みは湛えたままで。

「加えて人も悪いときた。わかつてわざわざ訊くのか？」

「来たらやることは一つしかねえだらう？」

「必ずしも前と同じ用件とは限らんじやう。昨日酒場に酒を飲
みに行つた人間が今日も同じ酒場に行つて、同じ酒を頼むとは限ら
んようにな」

「また妙な例を使うな。納得せざるをえん」

リディオルを頭を抱えて呻いた。

「ほつほつほつ。人生経験が足りんのう。ほれ、早よ出せんかい
「はいよつ、と」

懐の中から取り出したのは、銀と青で竜の絵が描かれた一枚のカードだった。それは富庭に属する者の証だ。

「ふむ。確かに。行き先は王国じやな？」

リディオルから受け取ったカードをしげしげと眺め、裏も返して確かめたところで、彼は尋ねた。

「そうだ。アルティナまで頼む

『乗客名簿』と書かれたファイルにカードの番号やら何やらを書き込んでいく。それが終わってからカードをリティオルに返した。

「ほれ。今回の出航は明後日のネボの日だ。心しておけ」

「そりやありがたい忠告なこった。ところで爺さん。一つ頼まれてくれねえかい？」

カウンターに片腕を乗せる。

「聞くだけ聞いてやろうかの。ほれ、言ってみい」

「俺のカードでもう一人ばかし乗せてやる、なんてことは出来ねえか？」

部屋の中には一人の他に誰もいなかつたが、リティオルはなるべく声を潜めて言った。

すると、男は目を眇めた。

「ほつ。そりやまたどうして？」

「俺の旧友が王国に行くんだ。ちょいとわけありでね。で、昔恩を受けた分をここいらで返してやろうかと思つてだな。出来るかい？」

「そういうのは職権濫用と言わんか？」

カウンターの向かいから乗り出していた身を起してから腕を組むと、深々と溜息を吐いた。

「名前はあくまでも恩返しだ。これ以後は一度とやらねえと約束する」

「一度でも「めんだがな。まあいい。お主の頼み」となんぞ、滅多に聞けるものではないからの」

「助かる」

先刻のファイルをもう一度カウンターの上で開く。

「それで、その二人の名は？」

書き込みながら問うた。

「シーリックとラスター」

11 海沿いの散歩

ここで話は一刻程前に遡る。

港の酒場の方へ歩いていた時、彼を初めに見つけたのはラスターの方だった。

「あれ？ シエリック、あの人つて」

ラスターが指を差した先になにやら黒いものが見え、それがローブだと気づくにはさほど時間を要しなかった。景色の中にその色がないせいが判り易い。暗いけれども目立つ色。矛盾した言い回しだと思いつつ苦笑を零す。

海からの風ではためき、それはまるでマントのよひこにも見えた。「リディオルだな」

宿屋の食堂で見た時と同じ姿だったので容易に人が特定出来た。立つたまま海の方向を向き、考え事をしている。まだこちらには気づいていないようだ。

「リディオル！」

ショーリックが彼の名を呼ぶと、呼ばれた方は顔だけ向ける。彼の一瞬見開かれた瞳はすぐに元の大きさに戻り、今度はまじまじと眺められた。

「こんなところで奇遇だな。散歩中か？」

「そうなるな。軽い食後の運動だ」

「そりやあい。意外にとは言わねえが運動不足は辛いぞ」

リディオルは自らを示し、現に俺がそうだからな、と笑つてみせた。

「それは普段動いていない分の代償だろ？」「

「職業上動けないからな。座りつ放し、籠もりつ放し。健康状態は悪い方じゃねえか？」

「聞く限りでは、な。その環境で何とか動くのは自分の意志の強さだ。人間、やろうと思えば何だって出来る

「俺の意志は弱いもんでね。やる事が多すぎるのも一つの難点だ」「時間は無限じゃない。その計画内でやるひつとしないから難しいと嘆くのだろう?」

「手厳しいねえ」

「どこがだ」

「誰もがその通りやれるわけじゃねえんだぜ?」

ラスターは一人の会話に入ることが出来ず、ただ黙つて聞いていた。口を挟もうとする気配はない。

「なあ、船の手続きは終わつたのか?」

シェリックの脳裏にふとある考えが閃いた。

「これから行こうと思つてる」

「船の通行証は持つているんだな?」

「ああ、そうでなければ渡れないからな」

リディオルが肯定の意を示して頷いたのを見ると、シェリックは

「ヤリと脣の端を持ち上げる。

「実は、俺達も王国の方へ渡ろつかと思つてな」

「ふん。それで?」

「ものは相談なんだが」

「この通行証で一緒に渡らせてくれ、と?」

取り出された一枚のカードを眺めやる。銀と青で配色されたカードだ。

「察しが良くて助かるよ」

「あそこまで聞けば嫌でも推測がつぐだり」

リディオルは大きく息を吐いた。やれやれ、といった心境だろう。

「出来るだけ交渉してはみるが、あまり期待はするんじゃないぞ」

「わかつてゐつもりだ」

「ならいい」

ぐるりと背を向け、灯台の方へと行つてしまつた。

と、ラスターが見上げてくる。

「大丈夫なのか?」

「とりあえず奴に任せておけ。駄目だつたら他の方法を考える」

「だね」

そのまま暫くは海の風に吹かれていた。

「ね。うまくいけば船代浮いたかな？」

財布を預かる身としては気になつてしまつのだらうか。そう言え
ば任せつ放しだなと今になつて思つ。

「さてな」

がしかし、ショーリックにとつてはまだひりでも良かつた。

リディオルが一人の元に朗報を持つてきたのは、ちょうどビタ飯を
食べ終わつた時だつた。

「どうにか取り付けた。出発は明後日だそうだ」

席に着くなり、開口一番にそう言つて。

「明後日つづーと……ネボの日か」

「出航の日つて意外に早いんだね。もつと遅いかと思つてた」

食後のお茶ならぬ、食後のファイを飲みながらラスターは言つた。
「当日の天氣にも寄るが……まあ、現時点での状況では、な。星読
みの奴も同意してることだし」

「星読み？」

聞いたことのない単語に聞き返してみると、何故か向かいでショ

リックが思い切りむせた。

「シリック？ 大丈夫？」

「ああ……」

リディオルにちらりと視線を投げかけている。しかし、リディオ

ルはさらりとかわして素知らぬ顔をしながら話を続けた。

「星読みつてのは占星術師のことだ。今は城や宫廷にいる奴が多い
が、ごく少数の奴は旅の連れになつたり、船の航行日和を選んだり
する仕事に就いてる」

「へえー。なんだ。ボク、今まで会つたコトないよ

「それもそうだろ。城の外にいる奴らは本当に少数だからな。どこの森の奥に籠もつてゐる偏屈とかくらいしかいんじやないか？」

「研究の為とか？ リディオルは占星術師なのか？」

ラスターは率直に訊いた。

リディオルはやけに詳しいことを知つてゐる。まるで、自分が聞いてきたかのような。

ふ、と笑みを浮かべた。

「いいや。俺は一介の魔術師さ。城にいるといつ点では奴らとあんま変わらんけどな」

「へえ」

リディオルの黒いローブを留めている銀の飾りを、じつと見つめる。

「ひょっとして、その銀色の飾りが、印、？」

何気なく尋ねてみた。

リディオルは少し驚いた表情を見せ、銀の留め具を軽く持ち上げた。

「ああ、そうだ。なかなか田舎といな」

「……妙なところにだけはすぐに気がつく奴でな」

ぼそりと低い声が聞こえた。

「うわ、失礼だなー。それがボクの良いトコロ、でしょ？」

につ、と笑う。

この世界では、職業毎に、印、と呼ばれるものを身につけるという決まりがあつた。

一例を挙げてみると、漁師は腕にバンダナを巻いたり、魔術師はリディオルのように銀の飾りを身につけたり、中には入れ墨を入れたりする職業もあるという様々なものだ。

いつの時代に誰が決めたものかは知らない。

一目で誰が何の職業かを見分けるのには便利だと言えるが、それに職業がはつきりとわかつてしまい、差別されたり、非難されたりといつことも少なくはなかつた。

「あ

ガタ。

突然ラスターが椅子から立ち上がったのを見て、リディオルは目を丸くした。

「どうしたんだ？」

「そろそろ寝ないと。明日の時間に遅れるんだ」

時計を指さし、リディオルに時刻を示した。

まだ寝るにはいささか早い時間だ。意外と健全な生活を送っているらしい。

ラスターはシェリックの方を見た。

「お子様は寝る時間、でしょ？ わかつてると。先に行つてるね」
自分の荷物を持ち、さっさと一階へと行つてしまつた。
その様子を見て呆然としているリディオルに、

「いつものことだ」と言つうと、

「そうなのか？」

怪訝な顔をされてしまった。

同じ場所の筈なのに、一いちぢなやけに黒臭く感じられる。ひょつとして、そんなに長い間使われていなかつたのだろうか。

否。そうではない。漂う空気の悪さが目立つのは単にこの場所の掃除を怠つていただけかもしないし、この場の雰囲気がそつさせているのかもしない。

今そんなことはどうでもいいのに無駄なことばかりが頭に浮かぶのは、現実に戻つて来たくないが為。何かで紛らわしでもしなければ、到底耐えられそうになかつたから。

「つ……」

充満する空気に催す吐き氣。それと同時に胸の奥からせり上がりくる久しく忘れていた感情。

何も考えずに唇を噛んでいたが、それが功を奏してか痛みのおかげで消えそうになる理性をぎりぎりで保たせていた。消したくない、残るのはその一心のみだ。

「所詮は暇つぶし、だろ。どうせやれることは何もないんだ」

そう言った相手の顔をぎり、と睨む。

「冗談じゃない」

「冗談を言つたつもりはないけどな。今まで退屈だつたんだろ？
丁度良いゲームをさせてやるんだ。ありがたく思えよ」

「信じられない」

「信じたつて何もねえよ」

言葉が出てこない。言い返せない。

「さて、選んでもらうぜ？」

影が差し、真上から見下ろされる。掴まれた腕はびくともしない。彼に対する抵抗なんて、あつてないものに等しい。それがわかつてしまつたから無性に悔しい。これが体格の差なのだと、思い知らされていよいよつで。

吐息のかかる距離。耳元でゅつくりと囁かれた。

「これは、命を賭けた選択なんだからな」

「 つー」

こつもよじも低い声音に、背筋が総毛立つ。もしも叶うなり、今すぐにもここから逃げ出したい。

耳だけは鮮明に、遠くから波の音を運んでいた。

そして三日後のネボの日。

ついにその日がやつてきた。

「いーい天氣ー」

宿屋の部屋の窓から身を乗り出して、港の方角を眺めているのはラスターだ。

ただ、その体勢は傍から見ているとも凄く危なつかしい。

「落ちるなよ」

案の定、シェリックから声が掛かった。

「へーきへーき。それよりも、絶好の航海日和じゃない?」

窓の縁に腰掛けて足をぶらぶらと揺らす。

「暖かいし、気持ちいいーし」

ラスターが目を細めて見上げる空はお世辞ではなく綺麗だ。雲一つなく、水平線と見分けがつかないくらい真っ青な色。

それは海とまるきり同じ色彩で、見ているだけで吸い込まれそうになる。まるで海を上空に映し出した鏡のようだ。

シェリックにそのことを話してみたら、

「むしろ逆じゃないか?」

と返されてしまった。

「そう? でも、どうちでも捉えられるよね

「そうだな」

いつの間にか隣にいたシェリックがふむ、と見上げた。

そんな結論に達したところでラスターは縁から飛び降りる。

間違つても外へ、ではなく。

「そつちは用意できたの？」

「ああ。待たせて悪いな」

シェリックは今やつとまとめ終わつた荷物を肩に掛けた。振り返りにそんな光景を見たラスターも、足下に置いていた自分の荷物と棒を持つ。

ちなみにこの『棒』、両先端に、珠、が付いていたりして杖と間違われることが多々あるのだが、ラスター曰く、あくまでも、棒、なのだそうだ。

「ねえシェリック、夜明け前に聞こえた汽笛つて、ボク達が乗る船だつたんじやないの？」

何気なく思つた疑問を口にする。

「あれは漁船だ。客船の出航は昼夜だから心配するな

「なんだ、違つたんだ。良かつた

ほ、と胸をなで下ろした。

この町の船は夜明けとほぼ同時に船の汽笛が鳴る。長年伝えられてきた伝統の、ルパの町に行われている朝の儀式。

「さてと」

二人は顔を見合わせ、どちらからともなくにつ、と笑つた。

「行くか

「行こつか

口に出したのはほぼ同時だつた。

ラスター達がたどり着いた港には、とうにリディオルの姿があつた。

海の方を眺め、ラスター達が来たことにはまだ気づいていない様子。そんな彼にシェリックが声を掛けた。

「早いな。朝は弱い方じやなかつたか？」

昨日見たのと同じ黒いロープを着てゐる。

振り返つたりディオルは、こちらの姿を見止めてから和らいだ表情を見せた。

「おいおい、いくら俺でも昼前には起きてるぜ。する事がなかつただけもあるけどな」

肩を竦めるリディオルの後ろには、小型だがそれなりに広そうな船が停泊している。

(船……)

ラスターは産まれてこの方、船を田にしたのは本日で一度田。前にこの港で話しかけられた漁師が乗っていた漁船と比べると、成程、確かにこちらの方が小綺麗で大きく、密船と言われるだけのことはあるようだ。

こんなものを水に浮かべてよく沈まないものだと感じた。

「この船がボク達の乗る船?」

ラスターの何となくの問いに、答えたのはリディオルだ。

「そうだよ」

「うわあ……！」

感動と好奇心、そして冒険心。

それらの感情が入り交じり、何とも言い表せない感嘆の声を漏らす。

実際に客船を田の前にして今まで抑えていた興奮が一気に膨れ上がった。こんなに楽しみにしていたのかと、ラスター自身も驚くほどに。

「ね、ね、あれがマストだよね?」

隣にいるシェリックの裾を引っ張り、上を指さす。

ちょうど視線の先の太陽が被り、片手で陰を作りながら田を細めた。

「ああ、そうだ」

今はまだ丸まっている白い布。括られている紐が解かれるのはもうすぐだ。

次第にうずうずしてきた気持ちが抑えられなくなり、ラスターは

船の方へと駆け出した。

もちろん、荷物は小脇に抱えて。

「おい！ はしゃぎすぎて転ぶなよ」

あまり効果はないだろうと知りつつも注意をしてくれる。その気遣いが少しくすぐつたかった。

「平気ー！」

ラスターは後ろ手に手を振り、走りながら船の中へと入って行った。

残された二人は、仕方ないな、という表情でラスターの背中を見送っていた。

すっかり保護者役である。

「やれやれ。せっかちな姫様だ」

「あの元気が向こうまで続くかどうか見物じゃねえ？」

「そうだな」

リディオルにつられ、シェリックも笑った。

「俺達も中に入ろう。置いて行かれたら笑い飛ばすだけじやすまされねえ」

「ああ

二人は足下にある各自の荷物を持ち、既に見えなくなつたラスターの後を追つた。

そして彼らは、船の旅へ。

暗く濁んだ水の上。

海底に潜む静かな悪意が海上まで浮かび上がる。

それは密かに、そして確かなものとして船の上にまで渦巻いていた。

気配に敏感な者にだけ感じられる妙な空氣、妙な気配。

(荒れるな)

ちらとよぎつた今日の日取り。

ネボの日。

浮かんだ嫌な気分を振り切るよつとして船の中に入る。
何事も、起こらなければ良いが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8011a/>

翡翠の星屑

2010年10月11日02時24分発行